「ジェンダー」の語の登場から衰退まで
—20年間の新聞で見るその推移—

遠藤　織枝

1．はじめに

2004年に東京都教育委員会が用語「ジェンダーフリー」の使用禁止の通知を出して以来、「ジェンダー」の語が新聞から激減したように感じている。この語が新聞紙上に出るようになったのもそれほど古いことではない。全く日本語としての存在を認められていなかった語が市民権を獲得して、さまざまな用法や複合語を生みながら、いわば百花繚乱のごとく紙上に躍動した時期があった。特に「ジェンダーフリー」の語は、自治体がこれを「推進する」というまでの勢いを得たのもつかの間、一転して集中攻撃の的となり「使用禁止」という言語ファッショのいけにえとされて、ごく短期間のうちに圧殺されるという悲劇的な運命をたどった。

本稿は、はかなく散った「ジェンダーフリー」へのレクイエムである。

2．方法

『讀賣新聞』（以下『讀賣』と略記）と『毎日新聞』（以下『毎日』と略記）のそれぞれweb版『ヨミダス文書館（読売新聞）』と『毎日News バック（毎日新聞）』を利用して資料を集めた。

日本の女性史研究にジェンダー論が登場するのは、1970年代半ばとされるが[(1)]、新聞に目にするようになるのは80年代後半なので、両媒体の1980年代後半から2007年末までの記事を検索して、「ジェンダー」とつく語を含むすべての文を抜き出す。そこで得た約3300件のデータを電子化資料として作成し、それに基づいて、新聞記述を追いながら時期的な推移、使用上の特徴、使用される複合語の様相、などを分析し、新聞における「ジェンダー」の語の20年史とする。なお、記事引用の際に、大阪版・石川版などと断らないものは東京版である。また、〔……〕は省略を示す。

3．「ジェンダー」の語の出現から衰退まで

表１と図１に過去20年間の両新聞における「ジェンダー」の語の出現数を示す。『讀賣』では1988年に２例、『毎日』では89年の１例が、両新聞での初出である。以後徐々に増加し、『讀賣』では2002年の236例、『毎日』では2000年の231例でピークを迎える。その後多少の増減を繰り返しながら2007年には最盛期のほぼ４分の１にまで激減する。

表１「ジェンダー」の語の年別出現数

年	『讀賣』	『毎日』
1988	2	0
1989	0	1
1990	5	0
1991	2	4
1992	5	4
1993	5	12
1994	15	11
1995	15	36
1996	37	45
1997	55	98
1998	57	160
1999	146	220
2000	121	231
2001	156	158
2002	236	172
2003	182	168
2004	142	166
2005	95	184
2006	118	126
2007	63	62
計	1457	1858

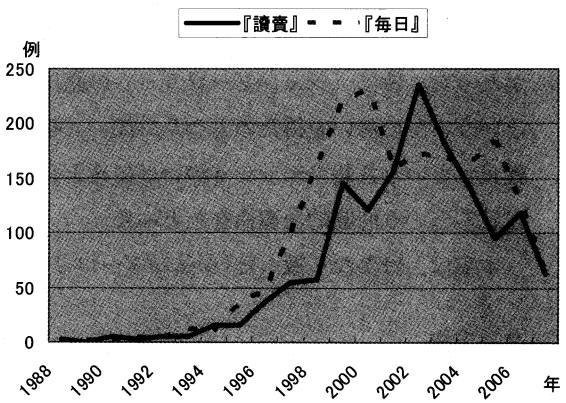

図１　「ジェンダー」の語の年別出現数

3．1　「ジェンダー」の出現

『讀賣』の初出例は以下のような「ジェンダー」である。（下線遠藤。以下同様）

例１　特にブッシュ陣営は予備選当時から、男性に比べ女性有権者の支持が極端に少ないという「ジェンダー・ギャップ」（性別による支持率の差）に悩まされてきた。（88. 09. 18）

この記事は、アメリカ大統領選挙関連のものなので、アメリカで使われている「ジェンダー・ギャップ」の語をそのまま導入しているが、このままでは読者に理解されないので、「ジェンダー・ギャップ」の前に「男性に比べ女性有権者の支持が極端に少ないという」という連体修飾句で説明し、さらにこの語の後に「(性別による支持率の差)」という補足もつけている。

『毎日』の初出例は、『讀賣』の約1年後のものであるが、ここでの使用もアメリカの選挙関連の「ジェンダー・ギャップ」である。

例2　最近の米国の選挙では、女性有権者がもっぱら女性候補に投票するなど男女の性差による投票行動の違いが目立ち、これをジェンダー・ギャップ（性差）と表現している。(89.08.22)

これらのアメリカでの使用例は、単独語の「ジェンダー」ではない。「ジェンダー」の語が一般的に理解されうるという了解のもとにつくられた複合語「ジェンダー・ギャップ」が使われている。こうした複合語が使われるということは、アメリカでは単独の「ジェンダー」の語はすでにそれ以前から理解されていたという前提に基づいている。ところが、日本ではそのような前提は存在しなかった。当時、またそれ以前の日本の新聞で「ジェンダー」の語やその概念について論じられた形跡はない。

初期の新聞の使用例を見ると、『讀賣』では、「『ジェンダー・バイアス（性による偏見）をなくすための検討委員会』が発足した」(90.01.22)、「『ジェンダー・ベリフィケーション』(性別証明）が国際オリンピック委員会（IOC）の公式用語になった」(90.12.04）のように、国際的なニュースの中で、使われている。

『毎日』でも、多くは、「スタンフォード大学『女性とジェンダー研究所』研究員のホーン川島瑤子さん」(92.01.06）や、「イヴァン・イリイチのジェンダー論」(92.08.31）のような外国関連の記事で、しかも固有名詞の中で使われている。

その後、出現度数が増えてくるにしたがって、例2の「ジェンダー・ギャップ（性差)」のように、「ジェンダー」や「ジェンダー」のつく語の概念を説明しながら記されるようになる。「ジェンダー・女性学研究所」が創設され

たことを伝える『毎日』の記事の中では、

例３ 「ジェンダー」とは生物学的な性差ではなく、「女の子にはピンク、男の子だからブルー」というような社会的、文化的に規定された「女らしさ」「男らしさ」のこと（95.05.18）

と記される。もっとも、これほど丁寧な解説がつけられるのは用語解説の欄などで、一般にはより簡単に、

例４ ジェンダーとは性差、性別を表す用語で〔……〕（『讀賣』91.06.10）

例５ 「家族とジェンダー（社会的、文化的性差）」（『讀賣』93.08.30）

のように用語に解釈語を加えたり、(　)の中に用語の説明を補足したりして、記事が書かれていくようになる。そのうちに、新聞記事の中には、

例６ 関西の大学では、ジェンダー関係の講義を必ずひとつは設けようという動きも進んでおり〔……〕（『毎日』94.04.25）

のように、「ジェンダー」の概念の受容や普及の動きを伝えるものも現れ、「ジェンダー」の語が日本社会で認められていっているようすが跡付けられる。ついで、

例７ 「そうしたジェンダー（社会的、文化的に作られた性差）による偏見を洗い直さない限り、労働でも福祉の分野でも女性の権利は確立されない。〔……〕」と話した。（『讀賣』94.02.24）

のような「ジェンダー」による偏見の除去と、女性の権利の獲得を結びつけた主張の中心的位置に「ジェンダー」をおいた積極的なコンテキストの中で使われるようになる。

３．２ 「ジェンダーフリー」の登場

偏見を打破するにはどうするか、偏見はなぜ生まれるのか、それは幼児期からの環境教育によって刷り込まれる、だから、幼児期からの教育が重要だ、というところにひとつの方向が向けられる。これが「ジェンダーフリー」である。この語がさらに複合して「ジェンダーフリー教育」の語が生まれる。こうした教育の中での「ジェンダー」からの解放は、「ジェンダー」の規範からの脱却のひとつの分野に過ぎないのだが、いつの間にか「ジェンダーフリ

一教育」が、人々が「ジェンダー」規範を取り除いて自由でゆたかな生き方を志向する代表的な目標となる。「ジェンダーフリー」の語は『讀賣』では

例８　東京女性財団（東京都千代田区）はこのほど、深谷和子・東京学芸大教授らの協力で女性問題研修プログラム「ジェンダー・フリーな教育のために」を作った。教員の初任者研修などのためで、報告書とは別にカラーの冊子「あなたのクラスはジェンダー・フリー？」も作った。(95.08.04)

の記事に初めて登場する。『毎日』では半年後に、

例９　今回は「ジェンダーフリーの社会をめざして」と題して4人のうちの教員石井てるみさんと保母、茅野あや子さんが問題提起して参加者とともに話し合う。(96.02.22)

として登場する。

この「ジェンダーフリー」の語はこれ以降徐々に増えていくが、その推移を表２に示す。引用例でもわかるとおり、表記に「ジェンダー・フリー」「ジェンダーフリー」の２種類が見られるが、本稿では引用以外では「ジェンダーフリー」に統一して論を進める。

表２「ジェンダーフリー」の語の推移

年度	『讀賣』	『毎日』
1995	1	0
1996	5	6
1997	1	5
1998	1	17
1999	16	33
2000	21	24
2001	27	22
2002	54	42
2003	49	59
2004	51	67
2005	23	57
2006	24	41
2007	13	2
計	286	375

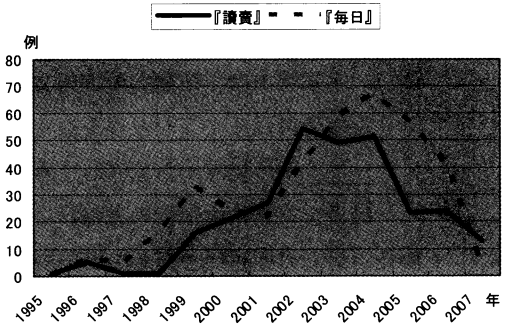

図２　「ジェンダーフリー」の語の推移

「ジェンダーフリー」の語が、多くの複合語の中で際立って多いことは、後で示す表５でも明らかである。ちなみに「ジェンダーフリー」の語は、『讀賣』で「ジェンダー」関係の総数1457語中の19.6%を、『毎日』で1858語中の20.2%をそれぞれ占めている。

90年代終わりの時期は「ジェンダーフリーな社会を目指して」(講演会)「ジェンダーフリー～男女がともに生きやすい関係を」(シンポジウム) など講演会やシンポジウムが盛んに開かれることを新聞は伝える。それらを伝える記事の中で、この語が多く登場し、読者の目に触れる機会が増えてくる。行政のほうでも男女差別撤廃・男女共同参画は大前提であるから、ジェンダーフリーの動きは歓迎するところとなり、流れにさおさしていくことになる。地方自治体の取り組み例として以下のような記事が載る。

例10　八王子市はゲーム感覚の問答形式で男女平等意識について考える「ジェンダーチェックカレンダー」を〔……〕市内の出張所、市民センタなどで無料配布を始めた（『毎日』99.03.03）

仙台市では「市女性問題協議会」の名称を改めて「仙台市ジェンダーフリー推進協議会」とした。「女性と男性が対等なパートナーとして参画できる社会（ジェンダーフリー）を作るのが目的」(『毎日』宮城版 99.06.19) だという。ほかにも、「ジェンダーフリーをめざす会」(『毎日』大阪版 99.07.19) が発足したり、「ジェンダーフリー絵本」を賞金30万円で募集（『毎日』99.12.21）したりして活発な活動ぶりが伝えられる。さらに、

例11　宇都宮市は、市発行の広報文書などから男女それぞれの固定観念を植え付けるような表現をなくそうと、「市刊行物の表現をジェンダーフリーの視点から見直してみましょう」と題した冊子を作り、市職員と市立小中学校の教職員に配った。(『毎日』栃木版 00.05.23)

例12　男女の性差にこだわらないジェンダーフリーな子育てを考えるセミナーが大阪府高槻市で開かれる。(『讀賣』大阪版 01.02.22)

例13　「男らしさ」「女らしさ」といった性差の意識をなくす「ジェンダー・フリー」の取り組みが、教育現場で徐々に広がっている。(『讀賣』大阪版 01.03.19)

例14　（埼玉県では）「0歳からのジェンダーフリー教育推進事業」として文部科学省の助成を受けて実践的なジェンダー教育のプログラム作りに取り組んでいる。（『讀賣』01.10.28）

などなど、各地で「ジェンダーフリー」推進の動きが盛んに行われていることを新聞は積極的に伝えている。学校での「ジェンダーフリー」のひとつの実践として名簿が取り上げられてきた。名簿の順序を男子生徒を先、女子生徒を後とする従来の形式への異議である。

例15　教育現場ではかつては「男子が先で女子は後」という順番が当たり前だった児童・生徒の出席簿について、ジェンダーフリーの一環として、男女交ぜて並べる男女混合名簿を採用する学校が増えている。（『讀賣』01.10.28）

と、ジェンダーフリーの成果の１例として、『讀賣』は好意的に伝えている。

同じころ『毎日』でも、「性によって差別されないジェンダーフリーの意識づくりがテーマである」（熊本版 02.03.20）。「総合的な学習の時間にジェンダー・フリー教育を」（02.06.06）。「～さんはジェンダーフリーをテーマにした絵本を自費出版した」（兵庫版 02.08.04）など、「ジェンダーフリー」実現のための活発な動きを伝えている。

３．３　「ジェンダーフリー」への逆風

このような流れが変わったのが2002年６月９日『讀賣』の朝刊[(2)]の投書であった。「『ジェンダーフリー教育』に心配」という投書が掲載された。男女の問題が、何か一つの方向に強引に「問答無用」の形で推し進められているかの現状を危惧する、というものであった。それを受けて16日には「『ジェンダーフリー心配』に同感」という19歳の学生の投書が載った。「ジェンダーフリーの影響かどうかわかりませんが、最近の男の子は『優柔不断で頼りない』と思うし、女の子は『言葉が乱暴で下品になっている』と感じるのですが」という趣旨のものであった。23日には「『らしい』こそ差別」という29歳の女性の反論が載り、30日には、「『らしく』や『ジェンダー』で縛らないでください」という32歳の男性の投書も追いかけた。

国会ではそれより前、４月に山谷えり子衆議院議員が「ジェンダーフリー教育の」行き過ぎを問題にしていたが、その時点では新聞では取り上げていなかった。10月14日の『讀賣』が、「ジェンダーフリー」推進の動きに逆風が吹き始めたと報じた際に、山谷議員の発言も載せた。

例16　「ジェンダーフリー」（性別による格差解消）の考え方の推進に、各地で逆風が吹いている。〔……〕今年四月の国会では山谷えり子議員（民主党）が、文部科学省所管の財団が作成した子育て支援冊子を「ジェンダーフリー」の行き過ぎ〕と批判。

と、これまで順風の中で「ジェンダーフリー」意識が普及してきていたのが一転して逆風に風向きが変わったことを報じた。『毎日』も10月13日の朝刊で山谷議員の発言を取り上げた。

こうした批判に対して翌月の『毎日』は、市民グループによって「負けないぞ！ジェンダー・フリー・バッシング」という学習会交流会が開かれることを伝えた（02.11.01）。また汐見稔幸東京大学大学院教授が、連載記事「おーい父親」の中で、「ジェンダーフリー」に対する自身の考えとして、「男らしい、女らしいと、各人が言うのは自由だし言いあえばよい。ただその中で時代に合わなくなっていて、そのために女性が差別される根拠になっているものをできるだけなくしていこう。これがジェンダーフリーなのだ」（02.11.01）とその思いを述べている。

『毎日』が批判とそれに対する反論とを載せ、バランスを保とうとしているのに対して、『讀賣』は批判の考えに傾いていく。

2003年２月27日の『讀賣』は、自民党議員が「ジェンダーフリー（性差の否定）思想に自民党はくみしないことを明らかにするために提案を行った」と報じた。また、３月16日の大阪版では

例17　（徳島県の県議が）「ジェンダーフリー思想を受け継いだ男女混合名簿は廃止するよう指導すべきだ」と述べた。（03.03.16）

と報じた。2003年５月18日朝刊では

例18　高橋史朗・明星大教授は「男女共同参画社会基本法のもとで、男女の特性を否定するジェンダー・フリーの動きが広がり、家庭教育

が危機にある」と指摘した。

と伝えた。高橋教授は「新しい歴史教科書をつくる会」（以下「つくる会」と略記）の元副会長として有名だが、「ジェンダー」や家庭教育の専門的研究者ではない。なお、同会元会長八木秀次・高崎経済大助教授（当時）の「ジェンダーフリー」批判についても、『毎日』が伝えている。その内容は、新潟の小学校校長が男女混合名簿をやめた、その理由は、八木助教授の著書に混合名簿の背景には男女の役割分担を否定する「ジェンダーフリー思想」があり、その根底は「マルクス主義フェミニズム」だと書かれていたからだというのである（03.6.28）。八木助教授については、『讀賣』も「ジェンダーフリー問題に詳しい」専門家として談話を載せている（西部版 05.01.20）。

さて、元に戻すが、同じころの『毎日』は少し書き方が違う。7月7日のコラム「論点」では、「ジェンダーフリー教育」に対して「『女らしさ』『男らしさ』をなくすことが『ジェンダーフリー教育』の目標なのではない。不合理な性差別をなくすために、『女らしさ』『男らしさ』の従来の枠組みを見直す視点として『ジェンダー』が重視されていることをきちんと確認しておきたい」と述べ、「ジェンダー」や「ジェンダーフリー」を排除するような考えは一切述べていない。

3．4 『讀賣新聞』の「ジェンダーフリー」攻撃

『讀賣』は2003年7月23日「ジェンダーフリーの“呪縛”を解け」と題する社説を掲げる。

例19 〔……〕不可解な教育が全国の学校現場で広がりつつある。「ジェンダーフリー教育」である。言い換えれば性差解消、つまり「男らしさ」「女らしさ」を全面的に否定する教育だ。〔……〕政府は昨年十一月にも、福田官房長官の国会答弁で、政府が推進する男女共同参画社会は、男らしさ、女らしさを否定するものではないと、“ジェンダーフリー教育”とは一線を画していることを明言している。〔……〕

「ジェンダーからの解放」は一九八〇年代にフランスのフェミニス

トにより提唱されたが、「ジェンダーフリー」という言葉自体は、特殊な日本的用語である。〔……〕

ジェンダーフリー教育は男女共同参画社会基本法の趣旨とは無関係である。教育現場は、「ジェンダーフリー」の呪縛から一刻も早く脱却すべきである。

新聞社自身の意見として「ジェンダーフリー」を呪縛といい、そこからの脱却を主張した。「ジェンダーフリー」は「性差解消」つまり、「男らしさ」「女らしさ」を否定するものだからいけないのだという。世論をリードする大新聞の社説としては実に表面的で浅い理解である。しかし、こうして「ジェンダーフリー」の真意を無視した表面的な決めつけで、「呪縛」からの「脱却」などと激越な言葉を振りまかれると世間は弱い。新聞が、「ジェンダーフリー」反対意見をはっきり打ち出したことで批判的世論形成に拍車がかかったことは想像にかたくない。

『毎日』は、9月30日の石川版で石川県が「ジェンダー・フリー」の用語を県文書では使用中止と決めたと報道。10月8日の鹿児島版は鹿児島県が9月にジェンダーフリー教育反対の陳情を採択したことに対して、「『ジェンダー（社会的、文化的な性差）の改善・解消を図るための教育を求める』陳情を不採択にした」と報道。10月23日の徳島版は徳島県の動きとして「ジェンダーフリーに一定の歯止め　県議会で賛成多数で採択　女性議員反発」と報じた。

12月31日の『毎日』の石川版では9月の石川県が「ジェンダー・フリー」の用語を使わないと決めたことに関連して、「記者の目」というコラムで詳しく論じた。「男女共同参画社会づくりに取り組む研究者らは、ジェンダー・フリーという用語や考え方への最近の批判をバックラッシュ（揺り戻し）と受け止めている」と述べ、さらに「ここで気になるのは、使っていたある言葉が自然消滅していくのではなく、意識的に排除される流れが生まれていることだ」という。県がこの用語を使わないように決めたことに対する異議申し立てだけでなく、用語の使用を禁止するという言論の自由への圧迫に対する疑義を申し立てている。

もっとも、行政側や『讀賣』での反対の主張が激しくなる中でも、「ジェン

ダーフリー」を掲げる会や活動は盛んに行われていた。「ジェンダーフリーを考える大阪女性の会」の活動（『毎日』大阪版 02.11.23）、桐生市が「桐生ジェンダー・フリープラン21」の実現に向けた報告書を提出（『毎日』群馬版 02.11.30）など。それらの意識改革に必要な術語として、「ジェンダー・バイアス」「ジェンダー・エンパワメント」（『毎日』00.06.30）「ジェンダーバランス」（『毎日』00.04.09）などの複合語も生まれてくる。また、「ジェンダー」に関するシンポジウムや、学習会なども多くなり、その題目には「介護とジェンダー」「ジェンダー入門講座」（『毎日』兵庫版 00.09.27）「生まれたときからのジェンダー・フリー」（『毎日』香川版 01.01.21）などの名のフォーラム開催が紹介された。さらに、「ジェンダー研究／研究会」「ジェンダー論」などの語も多く登場するようになり、「ジェンダー」を対象とする研究が広がり、分野も深まっていくようすが窺われた。

2004年になると、『毎日』山口版は３月９日山口県県教育長が県議会でジェンダーフリーの用語を使わないよう指示したとの答弁を載せた。

４月10日以降になると、石原東京都知事の「ジェンダーフリー」反対の発言が積極的になる。「ジェンダーフリーの考え方はこっけい千万だ」（『毎日』04.04.10）と述べたと伝え、６月には「石原知事　男女混合名簿を警戒―ジェンダーフリー反対で」の見出しのもと、次のように伝えた。

例20　石原慎太郎東京都知事は11日の定例会見で、公立学校の男女混合名簿について、「履き違えた男女平等運動に利用されているフシがあるなら気をつけなければいけない」と述べ、ジェンダーフリー反対の立場から警戒する考えを示した。（『毎日』04.06.12）

それに対してフェミニズム議連が抗議したことを『毎日』は報じる。

例21　石原慎太郎都知事が「ジェンダーフリー」の意味をわい曲したまま使用しているとして、全国フェミニズム議員連盟〔事務局・小平市〕は25日、「間違った明快な物言いが公式の場で行われるのは由々しきこと」と抗議する文書を出した。（『毎日』04.06.26）

さらに、『毎日』の広島版では、こうした行政側からのバックラッシュに危機感を持つ市民グループが講演会を開いて正しい理解を求めようとしている、

と伝えた。その代表者は「男女平等はまだまだだと思うのに、最近は『男は男らしく』のようにジェンダーフリーを否定しようとする動きが強くなっており、危機感を感じる」と語っているとも伝えている（04.07.23）。そう、確かに男女平等はまだ実現していない、だから、平等を実現するためにさまざまな活動が行われている。そのひとつが、「ジェンダーフリー」の推進である。しかし、「つくる会」の推進者など伝統的な男性優位の男女観を持つ人たちには、「ジェンダーフリー」は受け入れられない。まるで関係のない「マルクス主義フェミニズム」といった大仰なことばも持ち出し「男女の性差を否定する行き過ぎた思想」だとして、声高にそれをつぶしにかかったのである。

3.5 「ジェンダーフリー」の終焉

これら反対の動きを集約し、決定的にしたのが04年８月東京都教委の通知であった。

例22　「ジェンダーフリー（性別による格差解消）」という言葉が学校で誤った使われ方をされている例があるとして、都教委は二十六日、各都立高に対し、今後、都教委としては原則的に使用を取りやめるとともに、各校も使い方に注意するよう求める通知を出した。（『讀賣』04.08.27）

この都教委の通知に対する都教組の批判を『毎日』は載せた。

例23　〔……〕都教職員組合は７日、「（都教委の見解は）極めて一面的で偏見に満ち、教育の道理をわきまえないもの」と批判する見解を表明した。見解では〔……〕「用語の意味を正しく理解せず誤解と混乱を深めているのは都教委自身」だとして、撤回を求めている。（04.09.09）

９月23日の『毎日』は同様に撤回を求める市民団体の声明を載せた。10月14日には都教委の使用中止通知に、女性団体や教職員組合の反発が強まっている、と伝えている。さらに、「『ジェンダー・フリーの考え方に基づく混合名簿の作成』を禁じる今回の通知に学校現場では戸惑いが広がっている。」とも伝えている。

しかしながら、これらの反発は都教委の通知の圧倒的な力の前には有効な抵抗力とならず、以後公的機関ではこの語は使われなくなる。新聞ではまだこの語は出てくるが、それは「男女共同参画条例も作れず、ジェンダーフリーという用語を使用禁止にした」(『讀賣』07.06.27)「基本法の趣旨と懸け離れた『ジェンダーフリー教育』のあり方が問題になった時期もあった」(『讀賣』07.08.26) と過去形で語られるようになるのである。通知以後も数が急には減らない理由は、抑える側の動きが活発になってきて、抑圧の対象である語を明示する必要があったのである。

こうして、1995年8月に新聞に登場して以来、10年も経ないうちに、「ジェンダーフリー」の語は葬られた。ジェンダー規範に縛られた「男らしさ・女らしさ」からフリーになり、女も男も自分らしく生きること、また外面的な性と心の不一致に悩む人たちも、どちらかの性に縛られずに自由に生きられること、という至極当然な願いを求めることばが、あえなく消え去ってしまったのである。

4.「ジェンダー」の語の使われ方

上記引用の例文でもわかるとおり、この「ジェンダー」の語は括弧づきで使われることが多い。補足や、注釈を加えながら記事にすることが多いのである。まず、地の文で使われる場合と何らかの括弧とともに使われる場合とを比べてみる。

表3　括弧とともに使われる「ジェンダー」

	『讀賣』	%	『毎日』	%
括弧あり	549例	40.3%	681例	37.1%
括弧なし	813例	59.7%	1153例	62.9%
計	1362例	100.0%	1834例	100.0%

『讀賣』『毎日』とも同じような傾向で、括弧とともに使われる場合が約40%に及んでいるのである。このことは、「ジェンダー」の語が、補足や注釈なし

では使われにくい語であること、もうひとつは「国際ジェンダー学会」のような会名、また、「少子化とジェンダー」などといったシンポジウム題目として使われる場合が多い語であることを示している。逆に言うと、何の括弧もなしに「きょう学校で友達とジェンダーについて話し合った」のような使い方は少ないということである。このように括弧なしで使えるほどには、日本語として市民権を獲得していないということでもある。

次に括弧の中の説明の語句とそれぞれの出現度数をみてみる（次ページ表4）。

実に66種類もの説明が、「ジェンダー」の語につけられていた。それだけ、解釈が多様であるということと同時に、解釈が揺れているということを証明している。一方で、「社会、文化的性差」と「社会的、文化的性差」など大して違いがない説明が多いということもわかる。このことは、どこかで整理しようという努力もされないままに使われてきた結果であることも示している。このような多様で類似の解釈がなされていることが、一般日本人の「ジェンダー」への認識をあいまいにしてしまったともいえる。

特に「ジェンダー」を「性」「性別」「性差」「男女の差異」「男女の性差」のような、生物的な「性」となんら異ならない解釈で説明される例が多いことも、「ジェンダー」への理解を妨げてきたと思う。これらの説明で事たれりとしてきた新聞記者たちは、日本人の「ジェンダー」理解を誤らせ、正しい理解へと導くことを怠ったという点で非難されなければならない。

これほど正用誤用が入り乱れて新聞紙上に登場しているときに、これを整理統合しようとする動きがなかったのは残念であった。「日本ジェンダー学会」「日本語ジェンダー学会」などが存在し、ジェンダー概念を研究し普及しようとする動きはあったはずだが、このような概念の混乱した状況は見過ごされてきた。筆者も含めて言語を研究する者が軌道調整のための適切な努力を怠ってきたことも責められねばならない。

表４　「ジェンダー」を説明する語句

No.	語句	『讀賣』	『毎日』
1	ジェンダー〔性〕	4	16
2	ジェンダー（性差）	23	29
3	ジェンダー（性差異）	1	0
4	ジェンダー（性差別）	1	0
5	ジェンダー（性別）	4	5
6	ジェンダー（性役割）	0	2
7	ジェンダー（性的役割）	0	1
8	ジェンダー（性別役割）	1	1
9	ジェンダー（性差文化）	1	0
10	ジェンダー（社会的(な)性差）	38	44
11	ジェンダー（社会的(な)性別）	5	2
12	ジェンダー（社会的(な)性）	0	2
13	ジェンダー（社会的性差別）	1	0
14	ジェンダー（社会的(な)性役割）	2	0
15	ジェンダー（社会的側面から見た性別）	1	0
16	ジェンダー（社会的役割分担）	1	0
17	ジェンダー（社会的な男女の役割意識）	1	0
18	ジェンダー（社会的な役割としての性）	1	0
19	ジェンダー（社会的に作られた性差）	1	6
20	ジェンダー（社会的に作られた性別）	0	1
21	ジェンダー（社会的に作られた男女間の性差）	0	1
22	ジェンダー（社会、文化的(な)性）	0	4
23	ジェンダー（社会、文化的(な)性別）	0	3
24	ジェンダー（社会、文化的(な)性差	6	7
25	ジェンダー（社会的、文化的(な)性別）	5	3
26	ジェンダー（社会的、文化的(な)性差）	24	24
27	ジェンダー（社会的、文化的性差別）	0	1
28	ジェンダー（社会的、心理的性差）	1	0
29	ジェンダー（社会的、文化的な要因に基づく性差）	1	0
30	ジェンダー（社会的、文化的な男女の性差）	2	0
31	ジェンダー（社会的、文化的な役割としての性）	0	1
32	ジェンダー（社会的、文化的に形成された性差）	0	1
33	ジェンダー（社会的、文化的に形成された性別）	0	3
34	ジェンダー（社会的、文化的に形成された性差別）	0	1
35	ジェンダー（社会的、文化的に形成される男女の性差）	0	1
36	ジェンダー（社会的、文化的に形成される男女の差異）	1	0
37	ジェンダー（社会的、文化的に形成されてきた性による差別）	1	0
38	ジェンダー（社会的、文化的につくられた性）	1	0
39	ジェンダー（社会的、文化的につくられた性別）	6	1
40	ジェンダー（社会的、文化的につくられた男女の別）	0	1
41	ジェンダー（社会的、文化的につくられた男女の性差）	2	0
42	ジェンダー（社会的、文化的につく（りあげ）られた性差）	11	11
43	ジェンダー（社会的、文化的にみた性）	1	0
44	ジェンダー（社会、文化によって規定される性差）	0	1
45	ジェンダー（社会・文化的に求められた男女の役割・行動様式）	0	1
46	ジェンダー（社会的、歴史的、文化的につくられた男女の差異）	0	1
47	ジェンダー（社会的、歴史的に形成された性）	0	1
48	ジェンダー（文化的性差）	0	1
49	ジェンダー（文化による性差）	1	0
50	ジェンダー（文化による性差別）	0	1
51	ジェンダー（文化的、社会的（な）性差）	2	8
52	ジェンダー（文化・社会的性差）	0	1
53	ジェンダー（文化的、社会的につくられた性差）	1	0
54	ジェンダー（文化的、社会的につくられた性別）	1	0
55	ジェンダー（文化的、社会的（な）男女の性差）	1	0
56	ジェンダー（文化的に作られた性差）	1	0
57	ジェンダー（「女の子らしさ、男の子らしさ」といった社会的に作られた性差）	0	1
58	ジェンダー（男女の差異）	0	1
59	ジェンダー（男女の性差）	1	1
60	ジェンダー（男女の役割分担）	0	1
61	ジェンダー（男女の社会的性差）	0	1
62	ジェンダー（男女の社会的役割）	1	1
63	ジェンダー（男女の社会的、文化的な性差）	0	1
64	ジェンダー（男女の社会的な性差や性別役割分業）	1	0
65	ジェンダー（期待される性別の役割）	0	1
66	ジェンダー（自己認識している性別）	0	1

こうした括弧づきの説明補足が、この語が登場してから、激減するまでの20年間で扱いに変化が見られないことも、混乱状況への是正が行われなかったことを意味している。

例25　ジェンダーとは、性差、性別を表す用語で、このゼミの課題は〔……〕（『讀賣』91.06.10）

例26　〔……〕木本喜美子・社会学部教授らが進めるジェンダー（社会的、文化的な性差）教育プログラムのひとつ。（『讀賣』07.09.30）

例25のような90年代の初め、ジェンダーの語が使われ始めたころに、新しいことばとしてその概念を説明するのは当然であったとしても（説明の仕方には異議ありだが）、例26のように本稿の調査対象の最終年の2007年に及んでも、初期と全く変わらない基本的な説明の語句を（　）内に補い続けなくてはならなかったことは見過ごすわけにはいかない。登場後20年を経ても（　）の補足なしではこの語は使えないと新聞が判断していたのである。別の見方をすれば、（　）なしで記事が書けるように、記者たちは努力をしてこなかった、すなわち、読者の理解をはやく、正確なものにしたいと考えてこなかったことに思い至る。こうしたジェンダー理解の脆弱さが、反動の側からのバッシングへの抵抗力を育てられなかった弱さと通底するものと言わざるをえないのである。

5.「ジェンダー」の語による複合語・派生語

「ジェンダー」の語の使用状況は表１、２でみてきた。また、この語の説明の多さも見てきた。

この語については説明が多いだけでなく、この語から派生して作られた複合語・派生語が非常に多い。外来語との複合語とその使用度数を表５に、漢語との複合語とその使用度数を表６に示す。（　）内は新聞の補足説明の１例を示す。なお、「ジェンダーチェック」と「ジェンダー・チェック」など表記が２種類の語が多いが、この表では「ジェンダーフリー」の際に述べたとおり「・」なしの表記に統一している。

4．1 「ジェンダー」と外来語が結合してできた語

表５ 「ジェンダー」と外来語が結合してできた語

ジェンダー＋外来語	『讀賣』	『毎日』
ジェンダーアイデンティティ←男と女、自分がそのどちらに属するか	2	9
ジェンダーイクオリティ（両性の社会的平等）	0	5
ジェンダーイコール	1	2
ジェンダーイデオロギー	1	0
ジェンダーイメージ	1	0
ジェンダーウオッチ	1	1
ジェンダーエンパワメント〈指数〉←政治や経済への女性の進出度	16	16
ジェンダーギャップ（性差）	13	8
ジェンダークライシス	1	0
ジェンダー・クリニック〈委員会〉←性転換手術の実施に向けた専門委員会	19	32
ジェンダーシステム	0	1
ジェンダーシンポジウム	0	1
ジェンダースタディーズ	1	0
ジェンダーストレス←働く女性の	0	1
ジェンダーセンシティブ（性差に敏感）	3	1
ジェンダーチェック←性差別的な意識や言動を点検する	20	18
ジェンダートラブル	1	0
ジェンダートレーニング	0	4
ジェンダーバイアス（偏見）	24	25
ジェンダーバッシング	2	1
ジェンダーパネル	1	0
ジェンダーハラスメント←相手が望まない「男（女）らしさ」を強要する	2	0
ジェンダーバランス←審議会の委員の	0	2
ジェンダーバリア	1	0
ジェンダーフォーラム	2	5
ジェンダーフリー（社会的、文化的性差に基づく差別の撤廃）	286	375
ジェンダーベリフィケーション（性別証明）	0	1
ジェンダーポリティクス	3	1
ジェンダーマネジメント←企業経営と女性労働	0	1
ジェンダーレス←ファッションの	1	2
ジェンダーロール	0	1
ジェンダーワークショップ	4	4

表注：たとえば、「ジェンダーストレス←働く女性」とは、新聞紙面では「働く女性のジェンダーストレス」と記されている連体修飾と被修飾の関係であることを示す。

外来語と結合した複合語が32語収集できた。これら複合語のうち『讀賣』『毎日』両紙の合計で最も多いのがすでに述べた「ジェンダーフリー」の661語、次いで、「ジェンダークリニック」が51語、「ジェンダーバイアス」が49語、「ジェンダーチェック」38語、「ジェンダーエンパワメント」32語などである。ジェンダーを中心にしてできた複合語であるが、その複合語が、ジェンダーからの解放を意味するもの、ジェンダーの現状を伝えるもの、活動を中心とするものなど意味で整理すると、以下のとおり、４つに分類できる。

A：ジェンダーからの解放やそれを目標とする概念を示す語。

ジェンダーイクオリティ／ジェンダーイコール／ジェンダーエンパワメント／ジェンダーセンシティブ／ジェンダーバランス／ジェンダーフリー／ジェンダーロール

B：ジェンダーの現状を示す語

ジェンダーギャップ／ジェンダークライシス／ジェンダーストレス／ジェンダートラブル／ジェンダーバイヤス／ジェンダーバリア／ジェンダーレス／ジェンダーハラスメント

C：ジェンダーを対象とする行為、また、ジェンダーに関係のあることを示す語。

ジェンダーアイデンティティ／ジェンダーイデオロギー／ジェンダーイメージ／ジェンダークリニック／ジェンダーシステム／ジェンダースタディーズ／ジェンダーバッシング／ジェンダーマネジメント／ジェンダーベリフィケーション／ジェンダーポリティックス／ジェンダーマネジメント

D：ジェンダー規範からの解放を促し、その知識を普及するための活動を表す語

ジェンダーウオッチ／ジェンダーシンポジウム／ジェンダーチェック／ジェンダートレーニング／ジェンダーパネル／ジェンダーフォーラム／ジェンダーワークショップ

「ジェンダー」の概念が社会的に形成された性差であるから、そうして形成された性差によって不自由になり制約をうけるなら、その性差をなくそうとなる。そこで、対等平等を目指すことになるのでAのグループの複合語が生

まれる。また、そうした新しい概念の周知徹底を図ることが必要なので、Dのグループの語が多く作られるのである。

4．2 「ジェンダー」と漢語が結合してできた語

ここでは、「ジェンダー」と漢語が結合してできた語を拾い上げて、整理してみる。

表6 「ジェンダー」・「ジェンダーフリー」と漢語が結合してできた語

「ジェンダー」＋漢語	『讀賣』	『毎日』
ジェンダー意識	3	12
ジェンダー王国	2	0
ジェンダー化	1	1
ジェンダー解消	0	2
ジェンダー概念	9	3
ジェンダー開発指数	3	3
ジェンダー学	4	2
ジェンダー格差	1	2
ジェンダー学習	1	0
ジェンダー革命	0	1
ジェンダー家族	1	0
ジェンダー学会	12	16
ジェンダー観	1	6
ジェンダー間	2	1
ジェンダー環境	1	0
ジェンダー関係	2	1
ジェンダー関連	4	0
ジェンダー教育	9	13
ジェンダー研究	31	19
ジェンダー研究所	8	9
ジェンダー講座	1	1
ジェンダー構造	0	2
ジェンダー再生産	0	1
ジェンダー差別	4	2
ジェンダー史	3	2
ジェンダー指数	1	1
ジェンダー視点	4	4
ジェンダー賞	0	1
ジェンダー色	0	1
ジェンダー書籍	0	1
ジェンダー正義	0	2
ジェンダー政策	1	0
ジェンダー宣言	0	1
ジェンダー川柳	5	21

ジェンダー秩序	2	0
ジェンダー中立	1	0
ジェンダー的	1	2
ジェンダー度	1	1
ジェンダー図書	1	1
ジェンダー熱	1	0
ジェンダー比較	0	1
ジェンダー平等	3	11
ジェンダーフリー教育	47	43
ジェンダーフリー思想	8	7
ジェンダーフリー社会	4	7
ジェンダーフリー推進	2	3
ジェンダー本	13	2
ジェンダー問題	24	19
ジェンダー論	53	51
ジェンダー論争	1	0

「ジェンダー」と漢語の結合した語は50語採集できた。この種の複合語で、両紙合計で多いものの順に5位まで並べると、「ジェンダー論」104語、「ジェンダーフリー教育」90語、「ジェンダー研究」50語、「ジェンダー問題」43語、「ジェンダー学会」28語であった。これらの語を意味別にまとめてみる。

A:ジェンダーからの解放やそれを目標とする概念を示す語。

ジェンダー化／ジェンダー解消／ジェンダー開発指数／ジェンダー革命／ジェンダー視点／ジェンダー推進／ジェンダー正義／ジェンダー宣言／ジェンダー平等／ジェンダーフリー思想／ジェンダーフリー社会

B:ジェンダーの現状を示す語

ジェンダー意識／ジェンダー王国／ジェンダー格差／ジェンダー家族／ジェンダー間／ジェンダー環境／ジェンダー構造／ジェンダー再生産／ジェンダー差別／ジェンダー指数／ジェンダー色／ジェンダー中立／ジェンダー的／ジェンダー度／ジェンダー熱

C:ジェンダーを対象とする行為、ジェンダーに関係のあることを示す語。

ジェンダー概念／ジェンダー学／ジェンダー観／ジェンダー関係／ジェンダー関連／ジェンダー研究／ジェンダー史／ジェンダー書籍／ジェンダー政策／ジェンダー川柳／ジェンダー秩序／ジェンダー図書／ジェンダー比較／ジェンダー本／ジェンダー問題／ジェンダー論／ジェンダー論争

D:ジェンダー規範からの解放を促し、その知識を普及するための活動に関する語。

ジェンダー学習／ジェンダー学会／ジェンダー教育／ジェンダー講座／ジェンダー賞／ジェンダーフリー教育／ジェンダーフリー推進

外来語と結合した複合語の場合と異なるのは、「ジェンダー研究」「ジェンダー問題」などが多いことである。これは、ジェンダーからの解放を唱えたり、そのための活動を行ったりする時期より少し遅れて漢語の複合語が生まれてきたことを表している。つまり、「ジェンダー」がやや定着し、問題として捉えられ、研究対象となってきてからの造語といえる。

5．おわりに

1980年代後半から2007年12月までの新聞記事中のすべての「ジェンダー」を抜き出し、分析した結果以下の２点が判明した。

1、「ジェンダーフリー」の語はその意味と主旨を正確に理解されないまま、男女の性差をなくそうとする過激な主張だからよくないという歪曲のもとに、圧殺された。

2、1980年代末に「ジェンダー」の語が新聞に登場して以来、現在に至るまで括弧内に、「ジェンダー」の概念の説明をつける報道のしかたが続いている。このことは「ジェンダー」の理解が定着していないことを示している。さらには、「ジェンダーバッシング」に対抗する力も育てられなかったこととつながっている。

「ジェンダーフリー」の運動は、この語が英語に由来するか否か、「フリー」の意味が多様だから、誤解を招くなどの論議もされたが、それは外面的のことで、「ジェンダーフリー」つまり、「男らしさ・女らしさ」といった社会的性差から自由になるという運動の精神は間違ってはいなかった。また、「女らしさ・男らしさ」という概念は社会的に刷り込まれるものだから、人間成長の初期の段階でこの刷り込みを是正する必要がある、だから学校教育が重要だ、との考えのもと、学校で日常的な場面に「ジェンダーフリー」を取り入れて生徒・児童を教育しようとしたのは過激でも行き過ぎでもなかった。と

ころが「つくる会」や改憲をめざす「日本会議」を中心とした「ジェンダーフリー」反対論者の発言が世論を誘導し、また、それに新聞社が同調し、東京都知事が声高に反対論を主張した。そのようにして外堀が埋められたところに東京都教育委員会の通知であった。この通知に対する、抗議の声は大きくならなかった。言論封じの暴挙であると新聞も抗議しなかった。そうした日本社会の無力さが「ジェンダーフリー」の禁止を許してしまった。その結果、「ジェンダーフリー」の１つの段階として、現場の教師が地道に努力を重ねてやっと獲得した男女混合名簿も、元に戻ってしまったところがある。結局日本社会では「ジェンダー」が受け入れられないまま、「男は男らしく」という復古思想に回帰してしまうのだろうか。そういう危惧に苛まれるとき、ひとつ曙光が見られるのは、以下のような17歳の高校生の投書である。こうした若い心に希望をつなごうと思う。

男女「らしさ」なくす社会に

〔……〕県の教員として初めて育児休業をとった先生の講演をきいた。何げなく取得した育休がジェンダー（社会的、文化的に作り上げられた性差）を考えるきっかけだそうだ。先生は「男らしさ、女らしさという『らしさ』の縛りを打ち破るべきだ」と訴えていた。〔……〕男性にも優しい社会を築く意識を一人ひとりが持つべきだ。男女共同参画社会とは共に責任を担う、「らしさ」のない社会のことである。女性の社会進出がなされた今日、次は男性の家庭進出を促すべきだ。（『朝日新聞』08. 10. 25）

注

(1)『日本女性史大辞典』 p. 309「ジェンダー」の項目による。

(2) web版『ヨミダス文書館』では東京朝刊31頁とされるが、詳細は埼玉版32頁。

参考文献

金子幸子他編（2008）『日本女性史大辞典』吉川弘文館

佐々木恵理（2007）「『ジェンダー・フリー』の言語領域からの分析―”gender-free”の誤用と『ジェンダー・フリー』の混乱」遠藤織枝編著『ことばとジェンダーの未来図―ジェンダー・バシングに立ち向かうために』pp. 228-262　明石書店

戸張きみよ・藤田恵（2007）「東京都議会・地方自治体における『ジェンダーフリー』禁止の経緯と現状」遠藤織枝編著『ことばとジェンダーの未来図―ジェンダー・バシングに立ち向かうために』pp. 263-299　明石書店

若桑みどり他編（2006）『「ジェンダー」の危機超える！徹底的討論！バックラッシュ』青弓社

（えんどう　おりえ・文教大学）